

私はこう
考える

「親支援」とは言うけれど

「聴く」ことから

始まる関係を大事に

原 美紀

「びーのびーの」

巨大な政令指定都市である人口三七〇万人を越す横浜市において、初めて子どもをもった親たちが、もう少し地域で子育てできる居場所がほしい！と声を上げてできたのがNPO法人びーのびーのです。十年ほど前、子育て支援が叫ばれ始めたころ、保育園・幼稚園だけでなく、親の就業の有無を問わない、広い意味での在宅家庭支援の必要性を感じた子育て真っ最中の親たちが立ち上げたのが「おやこの広場びーのびーの」でした。親も子も「のびのび育ち合いい、支え合う環境づくりを目指そう！」ということ

で、「のびのび」の逆をとって「びーのびー」と名付けられました。

商店街の二十坪程度の空き店舗を借り上げ、初年度は手弁当で運営。その場の維持のために、かわるメンバーと必死になりながら、バザーや企業とのタイアップによる業務やイベントなどを行い、その収益金で、家賃や固定費を何とか支えていました。

世の中の流れが介護保険制度の導入後、子育ての社会化をどう推進していくかの検討に入った時期にちょうどびーのびーのような場が立ち上がったことで、私たちとしてもこのような場がこれから地域に点在していくことの必要性を伝えつつあったこと

ろに、とても速いスピードでこの事業が新規予算で国会を通過して、初めて「つどいの広場事業」が創設されました。横浜市も一年遅れて市費を上乗せし、「親と子のつどいの広場事業」として、びーのびーのも正式な補助事業となりました。

私たちがまず求めたことは「食う・寝る・遊ぶ」の三要素です。あたりまえなようで、当時、地域の場で子どもが過ごすためのこの三要素が満たされる場は皆無でした。公共施設では、おむつ替えや授乳行為はもちろんのこと、飲食さえもできないところが大半でした。

びーのびーのは創設から十二年を経た今も、九時半～十六時まで開き、毎日基本2名のスタッフと共に、学生を含めた多様かつたくさんのボランティアが通ってきています。未就学児家庭を対象とする事業ですが、「主に〇歳から三歳児とその親のためのもう一つの家」として、一日平均15家庭ほどが行き来しています。

今はこのようなひろば事業が全国に約六千か所に

広がり、北海道から沖縄まで実践者が増えてきています。子育てする中で親子の居場所の選択肢が増えることにより、生活リズムをつけたり、気軽に相談ができたり、親自身で共助の関係をつくったり、地縁組織の方々との顔つなぎができたり……これからの親子の暮らしを支える安全網を築ききつかけとなっています。



▲それぞれが思い思いに過ごすひろば
（「おやこの広場びーのびーの」の日常風景）

ひろばで大事にしていること

ひろばで大事にしていることは、親子ともども「その人自身を受けとめる」ということです。

私たちのところに常連のように通う利用者の中に、わが子のことを「へたれちゃん」と呼ぶお母さんがいました。ヘルパーの資格もあって、とても気が回って、ひろばに来ると他の子の面倒をたくさん見てくれて、他の親のサポートもさりげなくしてくれているすてきなお母さんですが、スタッフ内の話し合いで、実は認められたいって思う気持ちがとても強いのではないかと、という意見が出ました。わが子を卑下することも多い一方、他の子にモノを投げられたり、取り合いになると、わが子と共に被害者的な意識が強くなったり、不利益を受けがちな発信下手な子の母親という立ち回りをします。

いろいろな意味で不安であり、そのことをわかってくれる誰かが欲しくてアピールしているようです。ひろばでは精いっぱい、スタッフもボランティアも

一緒になって聴くこと、親の気持ちも聞きつつ子どもはどうか？ と双方に寄り添うことから始めます。子どもが就園する前というのは、所属感の無さから来る浮遊意識があり、どこかに帰属している「私」という意識をもちくに時期です。

従って、ひろばに来てくれる間は、その存在を認め、子育て中にもかかわらずこんなにも力を発揮してくれている「あなた」に感謝を示すことを大事にしています。子どもの誕生日も、親族だけでなく、ひろばに来てくれる全員でお祝いをし、悲しいことも辛いことも一緒に受けとめていくよ……というメッセージをこの時期に発信していくことがとても大事だと思えます。

ひろばにおける親支援

ひろばでやっている親支援は、「ただ、そばに居る」「聴くことに徹する」存在になること、そして困った時、立ち行かなくなった時に、より具体的な「手」になることに尽きると思っています。

一度誰かに受けとめられて支えられた人は、全員ではありませんが、確実に次の人を支える側に回っていくようです。このことは、びーのびーのの現スタッフ、ボランティアが利用者から循環して成り立っていることにも表れており、それが一番の成果とも感じていきます。

大変だった経験をもつ人ほど、自分が助けられた実感と、大変だという当事者意識を大事に、他者のために動くことができるようです。医療やカウンセリング等、ケアする過程で絶対的に必要な数々の療法がある一方で、残存している能力やその人の意思も忘れずに引き出していくこと、そして、ケアがその人の暮らしの中で持続的に保障されていくという生活者視点の支援も必要です。

親支援とは、そのこと自体が、子どもや子育て環境に還っていくことにつながるものであってほしいというのが、私たちの願いです。

子どもと共に、親も親として成長していくので、

学生時代から就業期を通じて長い期間、子どもがいない生活を過ごしてきた親になりたての人たちに、親としての在るべき姿、時に旧態依然の感覚を突き付ければ、意識の乖離はひどくなる一方です。

むしろ、親が親になるための転換をがっちりゆつたりと支えていくことが必要です。自分自身で判断できる力、判断したいという権利は絶対的に守るもの、そして最終的な親支援は、その人自身の力を信じることなのだと思います。

(NPO法人びーのびーの事務局長)



▲ボランティアと利用者の交流風景
(びーのびーのが運営する
港北区地域子育て支援拠点「どろっぴ」にて)